


「高齢者が主役の農福連携」を起点とした 法人の多角化・多機能化

社会福祉法人 陶都会（岐阜県）

住 所	〒509-5202 岐阜県土岐市下石町304-839	
TEL	0572-57-5722	
URL	https://tohtokai.jp/dream.html	
経 営 理 念	陶都会（世代交流拠点）を中心とした地域の輪をひとつの『家』として捉え、地域共生社会の実現を目指す	
事 業 内 容 （箇条書き） 及 び 定 員	特別養護老人ホーム（80名）1か所 ショートステイ（20名）1か所 ケアハウス（30名）1か所 養護老人ホーム（40名）1か所 地域包括支援センター 1か所 認定生活困窮者就労訓練事業所 1か所	
収 入 （法人全体） 令和元年度決算	O 社会福祉事業	641,054,231円
	II 公益事業	27,293,556円
	P 収益事業	0円
職 員 数 （法人全体）	83名（非常勤含む）	

『高齢者が主役の農福連携』を起点とした 法人の多角化・多機能化



I 法人概要
II 『高齢者が主役の農福連携』とは
活動内容及び成果
III 農福連携を起点とした
法人の多角化・多機能化

社会福祉法人 陶都会

I 法人概要



●法人設立 2002年

●事業内容

ドリーム陶都 岐阜県土岐市下石町

- ・特別養護老人ホーム 80名
- ・ショートステイ 20名
- ・ケアハウス 30名
- ・農福連携事業
- ・認定生活困窮者就労訓練事業所

多容荘 岐阜県多治見市旭ヶ丘

- ・養護老人ホーム 40名
- ・地域包括支援センター

●職員数 83名（非常勤含む）



Ⅱ 『高齢者が主役の農福連携』

高齢者福祉施設では、座る・立つ・歩く・食べるなどの身体機能のサポートが業務の中心ですが、本来は高齢者の生きがいや社会的役割の創出、地域との繋がりづくりまで積極的に踏み込むことで、はじめて高齢者の人生を充実させる役割を真に果たせるのではないかとの問題意識を長年抱いていました。また、HACCP等の衛生管理体制が確立されていく一方で、今一度「食」について根本から見つめ直したいと考えていました。

そんな中、障がい者福祉では定着しつつあった農福連携に注目し、2016年度より、現在の「高齢者が主役の農福連携」の基礎となる活動（当時は家庭菜園程度の規模）を施設敷地内で開始。

2018年度に農山漁村振興事業（福祉農園整備事業・支援事業）の採択を頂き、施設（特養・ショートステイ・ケアハウス）敷地内（約2000㎡）に圃場・ビニールハウス・鶏舎・井戸を整備し、循環型農業が出来る環境を整えて、「高齢者が主役の福祉農園」を創設しました。

さらに、高齢者とその介助者を対象とした福祉農園マニュアル（作業手順と期待効果、介助のポイントなどを記載）を作成し、農業生産から加工・販売まで、高齢者を交えながら一貫して取り組む事ができる体制作りを行ないました。

Ⅱ 高齢者が主役の農福連携



整備前



整備後

施設西側の法人所有の空き地を畑地化しました。畑土を購入するのではなく、「移動式篩い分け工法」を採用。現場の土を鋤取り篩い分けし砕石→砂利→砂、土の順に埋め戻すため、残土が発生しません。環境にやさしく、コストも削減できます。

そのままだと真砂土が主で腐食が無く、有機農業には不向きなため、発酵鶏糞、堆肥を投入、緑肥を栽培し圃場にすき込むことにより、豊かな土壌に生まれ変わらせます。



Ⅱ 高齢者が主役の農福連携

●農園の特徴

化学合成農薬や化学肥料不使用。地域で確保可能な有機物（生ごみ、落ち葉、米糠、もみ殻、おから）鶏舎の鶏糞を堆肥化・循環活用し、安全・安心な野菜を栽培。

主要作物は、圃場の腐食がまだまだ不十分なため、栽培が容易で加工に向いているさつまいも、大豆の他、季節の野菜、ブルーベリー等になります。

また、農作業をされない方にも利用していただけるよう、車いすが通れる遊歩道、ミニチュアの田んぼ（コシヒカリが3kgほど収穫できます）、植栽、花も育て、季節を感じられ、誰もが楽しむことができる環境整備をおこなっています。



圃場の水は井戸水を使用→



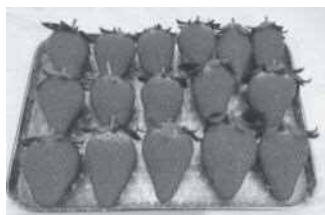
堆肥舎

Ⅱ 高齢者が主役の農福連携

●いちごハウス

露地栽培を行っている他の作物と同様に、いちごに関しても化学合成農薬や化学肥料不使用。地域の有機物、鶏舎の鶏糞を循環活用した堆肥、有機培養土、ピートモスを使用した有機質培地で高設栽培を行っています。また、慣行のいちごは暖房により加温し早く、大きく、たくさん育てますが、当法人のいちごは、収量は落ちますが無加温でじっくりと育て、いちご自体が身が凍るのを防ぐために糖度を上げる習性を利用することで、身が締まり糖度も高く、味の濃いいちご完熟いちごを収穫しています。

いちご栽培を化学合成農薬や化学肥料不使用で行うこと自体ハードルが高い上に、要介護高齢者、特に車いすの方でも農作業ができるよう、高設栽培を選択しました。（プロの農家でも、化学合成農薬や化学肥料不使用で栽培を行う場合は土耕栽培）そのため、様々な課題がありますが、商品ストーリーも含めた高付加価値いちごとして差別化を図ります。



通常は高設ベンチを5列の所を、中央を車いすが通れるスペースを確保し4列に。収量は落ちますが、それ以上の価値に気づくことができます。

Ⅱ 高齢者が主役の農福連携

●【SDGs つくる責任・つかう責任】 自家製発酵飼料で要介護高齢者が育てた鶏卵

自然卵養鶏法を用いたアローカナ（交雑種）の青い卵です。「うませる」ではなく「いただく」の精神を大切にしています。生臭さがなく濃厚な味が特徴です。また、黄身の色は、意図的に濃くなるような着色料や専用飼料を与えていないので、本来あるべき色であるレモン色をしています。



自然卵養鶏法は今からおよそ40年前、中島正氏により確立された養鶏法です。「空気」「日光」「水」「大地」「緑草」この5つの自然の恵みを十分に与える飼育管理方法です。

- | | | |
|----------|---|-----------------------|
| 1：平飼い | → | 鶏舎内の床は土間にし、自由に動き回れる |
| 2：開放 | → | 空気と日光を十分に与える |
| 3：少羽数 | → | 労力を掛けて少なく生産する |
| 4：薄飼い | → | 密飼いは病気のもととなる |
| 5：粗飼料 | → | 緑草を豊富にし、繊維が多い飼料を与える |
| 6：自家配 | → | 発酵飼料を与え、薬剤は一切使用しない |
| 7：自家労力 | → | 自分達の労力の範囲内でしか飼育しない |
| 8：低成長育成 | → | 早く大きくすれば、鶏は早くくたびれてしまう |
| 9：腹八分給餌 | → | 空腹にして給餌すれば消化吸収が良い |
| 10：八分目産卵 | → | にわとりの生存率が高く、卵質も良くなる |



農園の雑草、野菜くず、地域のお豆腐屋さん、米穀店さんから本来廃棄されるおから、くず米等でつくった自家製発酵飼料を鶏が食べ、鶏糞は農園の肥料として循環させることで、SDGs の概念に基づいた持続可能な飼育をおこなっています。

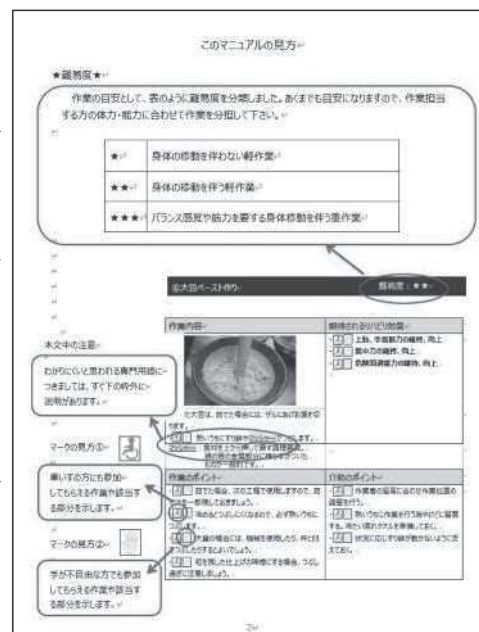
Ⅱ 高齢者が主役の農福連携

●農福マニュアル

機能回復訓練、介護予防とは身体機能の回復、維持がゴールではありません。その後の人生が最も大切であり、そのために何ができるか。そんな思いを込めて、福祉農園マニュアルを作成しました。

この福祉農園マニュアルは、作業難易度を三段階に設定し、作業内容・作業のポイント・期待される機能回復効果を作業ごとに記載してあります。また、農業はあまり経験がないといった介助者向けに、専門用語の説明、農作業時における介助のポイントを写真と文章でまとめました。

選定作物は大豆、いちご、ブルーベリー、さつまいも等になります。また、大豆は味噌に。いちご、ブルーベリーはジャム。さつまいもは干し芋へ加工することで、施設内外で行なわれるイベントでの販売は勿論、自家消費をすることで、施設の食事を豊かにしてはどうでしょうか。例えば、自分達で育てた大豆を加工し味噌汁をいただく。最高だと思えます。



Ⅱ 高齢者が主役の農福連携



●農福連携で介護予防（中日新聞）



●収穫物をオーガニック給食を推進する保育園へ（中日新聞）

Ⅱ 高齢者が主役の農福連携



●鶏卵を大河ドラマ館で販売
●ふるさと納税返礼品として出品



●土岐市学校給食センターに納品

Ⅱ 高齢者が主役の農福連携

施設管理栄養士による『ドリームランチ』の定期開催をスタートしました。ドリーム農園で収穫した旬の野菜、運動場を駆け回る健康なアローカナ卵を使用した『ドリーム陶都』ならでは、のランチは、ご利用者並びにご家族にもご好評をいただいております。『食』を楽しみ、たくさんの笑顔をお届けしたい！その思いを込めて形にしました。



●農福連携で得た利益でマグロ解体ショー
(2020年度は62キロのマグロを購入)



●収穫したいちご、鶏卵でつくった
サンドイッチ。夏野菜で油淋鶏・



●収穫した大豆で味噌づくり
→施設の朝食に使用

Ⅱ 高齢者が主役の農福連携

●介護予防効果について

【事例1】

農園に出るとBPSDが改善され、通常の会話ができるようになる。その後、部屋に戻られてからも落ち着いて過ごされた。
もし農園がなければ、翌日精神科へ受診になっていた。

【事例2】

パーキンソン病で、普段は目をつむっている事が多く、食事もほぼ全介助の方が、イチゴ苗を植え付ける時はしっかり目を開け、自ら手を伸ばし意欲的に作業された。



農作業や、収穫物を通し社会と繋がる（役割を持つ）ことで、施設での生活に生きがいや明確な目的意識を生じさせることができ、その事が、身体機能の維持、或いは回復に繋がるのではないかと。

**ICF（国際生活機能分類）で示す、
【参加】 【活動】 【環境因子】 の充実を農福で**

Ⅲ 農福連携を起点とした法人の多角化・多機能化

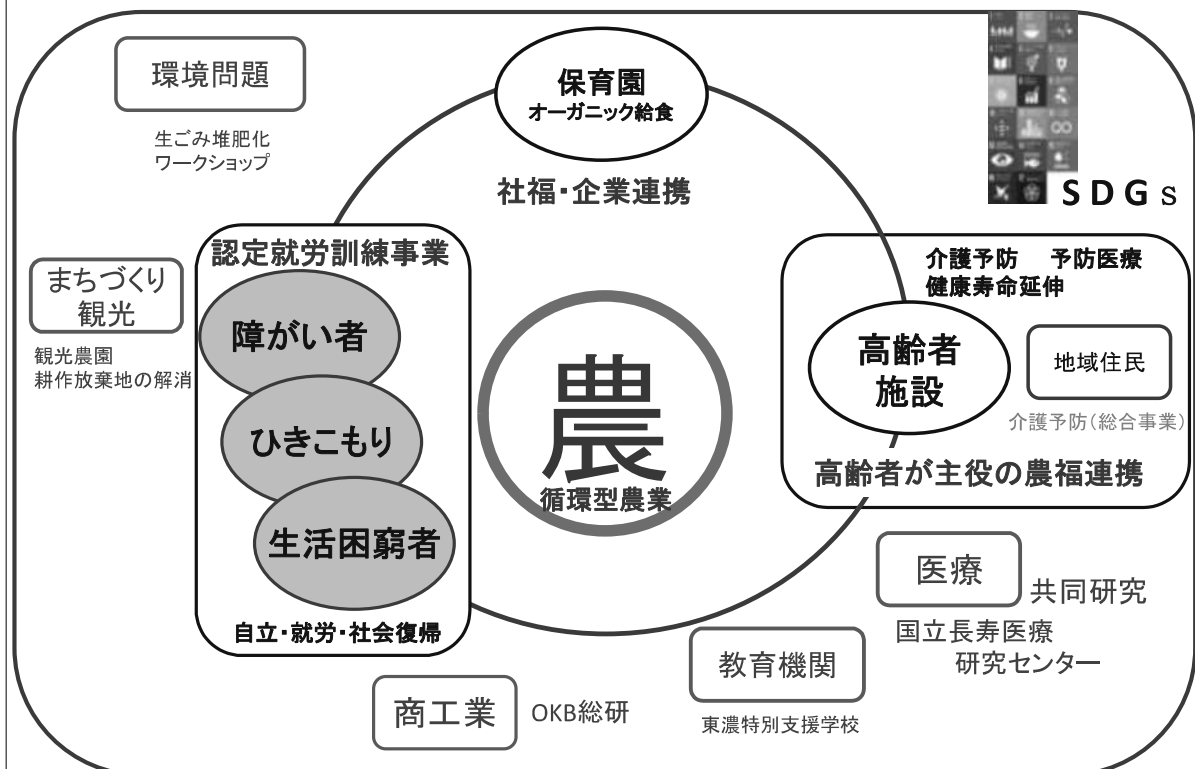
当初は、要介護認定を受けられた高齢者の機能回復訓練、生きがいづくりを目的として立ち上げた『高齢者が主役の農福連携』でしたが、取り組みを通し、他業種の方とも多くのご縁をいただくことで発想、活動の輪が広がり、『農』を起点とした、

- ・ 高齢者施設の多世代交流拠点化（隔離の解消）
- ・ 社福、企業連携
- ・ 障がい、引きこもり、生活困窮者の就労支援
- ・ 福祉的 小規模家族農業
- ・ SDGsの達成
- ・ 職員教育（自然を通して学ぶ、気づく）



等への発展、そして、地域共生社会の実現に繋がるのでは。そう考えるようになりました。

Ⅲ 農福連携を起点とした法人の多角化・多機能化



Ⅲ 農福連携を起点とした法人の多角化・多機能化

● 2020年度より 認定生活困窮者就労訓練事業を開始

自立相談支援機関のあっせんに応じて、就労に困難を抱える生活困窮者に対し、その状況に応じた就労の機会を提供しながら、一般就労に向けた支援を行う事業です。利用者は、雇用契約を締結せず訓練として就労を体験する形態（非雇用型）、または、雇用契約を締結した上で支援付きの就労を行う形態（雇用型）のいずれかで就労を行います。どちらの場合も、本人の状況に合わせてステップアップしていき、最終的には一般就労につなげることを目標とします。

岐阜県内に所在する事業所において、生活困窮者就労訓練事業を実施する場合は、その事業所ごとに知事の認定（岐阜市内に所在する事業所において実施する場合は、岐阜市長の認定）を受ける必要があります。（岐阜県ホームページより）

障がい者、ひきこもり、生活困窮者の就労に向けたきっかけづくりを農作業・介護補助業務で。現在、ジョブコーチ4名在籍。市内教育機関とも連携し、本人のペース、状況に応じた支援を行っています。



Ⅲ 農福連携を起点とした法人の多角化・多機能化

高齢者が主役の農福連携、認定生活困窮者就労訓練の充実は勿論、事業の更なる多角化、多機能化、継続性を担保するためには、6次化に向けての取組は必要不可欠です。

既存の設備では限界があるため、今後は、農山漁村振興交付金事業（6次化）の申請を視野に入れ、基盤整備を行っていきます。



●アローカナ鶏卵
（自社製品）



●いちごジャム
（自社製品）



●干し芋
（自社製品）



●アローカナ鶏卵を
使用したカステラ
（OEM）

Ⅲ 農福連携を起点とした法人の多角化・多機能化



●6次化に向け、茨城へ干し芋研修（日本農業新聞 北関東）



Ⅲ 農福連携を起点とした法人の多角化・多機能化

● 経営層も一般職員も自然を通して学ぶ

「農」を通して生命の本質を学びながら、人間らしさ（知性、感情、意志力）を磨き、本来、提供すべき医療、介護サービスはどういったものがより良いか、再考する機会とする。

「人として・・・、或いは、その人らしく・・・」といった言葉を、高齢福祉の中でよく耳にするが、「主体性をもって誰かのために活躍できる場」が提案できなければ、いくら介護技術、リスク管理のレベルを上げて、それはただ、その方の状態、病状をコントロールしているだけに過ぎない事にまずは気づき、次の職員を目指す。



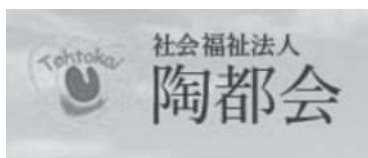
- ・ やったことがないことをやりたがる人
- ・ あきらめる（どうせ無理）ではなく、工夫する人
- ・ 去年できなかったことを一つだけやってみる人

Ⅲ 農福連携を起点とした法人の多角化・多機能化

国立長寿医療研究センターと

これまで、「高齢者が主役の農福連携」での活動が、役割意識の向上、ADLの維持、BPSDの改善に繋がっていることは感覚的には感じていましたが、法人単体での検証（長谷川式スケール、FAB検査、Vitality Indexを活用した検証方法）には限界があり、大きな課題となっていました。

そうした中、2020年度に国立長寿医療研究センターとの協力関係を構築し、共同研究を視野に入れることが可能となりました。これにより、当初からの課題であった農作業、養鶏参加による機能改善、介護予防効果の検証に目途が立ってきました。



最後に

農作業を細分化し、加工・販売まで一貫して取り組むことで、その中から必ず対象者に合った機能回復訓練・役割を発見できます。また、活動を通し地域と繋がることにより、社会での役割、生きがいを持つことが、機能回復訓練への更なる意欲、人生をより豊かに・・・といった好循環を生み出します。さらに、これまで高齢者のための施設（特別養護老人ホーム、ケアハウス等）であったものが、多世代交流拠点に生まれ変わり、それにより、地域共生社会の実現にも寄与できるものと考えます。是非、皆さんの法人でもいかがでしょうか。全国的にまだまだ例が少ないと思いますが、こうした挑戦が広がり、高齢者による農福連携の輪が広がっていく事を願います。

事務局長 田中良和



●ジャズシンガーによる農園コンサート